研究ライブラリー／レッスン 01

グリモワールを読む方法

文書、内容、読まれてきた歴史

01 文書

02 内容

03 文脈

学習、解説付きの資料、テーマ別の参照。
事例資料、演習、理由を示した解答を収録。

日本語版

学習の進め方

学習本文と参照資料を兼ねた一冊です。第1〜9節で方法を学び、第10〜15節で内容の読解を深めます。第16節は参照用、第17〜20節は実践と見直しのための項目です。

学習を始める前に 2
1. 資料としてのグリモワール 3
2. 実際に読んでいるものを特定する 4
3. 扉の記述をそのまま受け入れずに読む 5
4. 資料と併せて目録を読む 7
5. 諸版を比較する準備 8
6. 物としての特徴と欠けているものを見る 9
7. 違いが手がかりになるとき 10
8. テキストの類縁関係から伝承の仮説へ 12
9. 検証できる結論を書く 13
10. グリモワールの構成を読み取る 14
11. 名称・語りの声・権威 16
12. 安易な同一視をせずにリストと用語を読む 18
13. 画像・図式・文字のページ 20
14. 歴史的な内容を読む：解説付きの例 21
15. 書物から読者と社会へ 24
16. 参照用ガイド：概念と学習の進め方 26
17. 総合演習：発見から資料集の項目へ 28
18. 調査演習 30
19. 根拠を示した解答 31
20. 作業を見直し、学びを定着させる 33
21. 出典と参考文献 34

架空の事例は演習として明示しています。解答は別に示しています。角括弧内の参照番号は第21節の資料に対応します。

日本語版。原文に合わせた内容を、日本語の組版に合わせて配置しています。原版とページ数が異なる場合があります。課題の語数指定はスペイン語原文の基準です。日本語母語話者による確認は行っていません。

学習を始める前に

古い書物であるとされる本の複製を開いたとします。扉にはソロモンの名があり、ヘブライ語からの翻訳だという説明と、印刷地と刊行年が記されています。中には霊的存在の名、図、指示が並んでいます。文章を読み、多くの言葉を理解できたとしても、目の前にある資料が何なのかは、まだ分かりません。

このレッスンでは、その問題を解く方法を学びます。書物自体の主張、その一冊を観察して分かること、研究者が提示する解釈を分けて考えます。学習の成果として、批判的読解の記録票と、書物を構成する語りの声、リスト、画像、権威のあり方、読者との関係を調べるための基礎を作ります。何を資料として使い、そこから何を結論づけられるのかを説明できるようになります。

ラテン語、古フランス語、古文書学の知識は必要ありません。必要な箇所にはスペイン語原文で説明が付いています。ただし、違いに注意を払う必要があります。おおよその年代と印刷された年は同じではありません。写本とその刊行版も、示唆に富む比較と立証された書写の連鎖も、区別しなければなりません。

主な事例として『Grimorium Verum』を取り上げます。Wellcome Collection所蔵の写本の記述も参照し、『Arbatel』と構成を比較し、学習用の資料セットにも取り組みます。歴史資料と練習のために作られた架空の事例は明確に区別します。学習用の事例を、文書館で発見された史料として提示することはありません。

このレッスンでできるようになること

- 読解に用いた具体的な伝本を特定し、所蔵機関、参照情報、閲覧に際して介在した資料の形態を示す。
- ある主張を、資料自体の記述、目録の情報、観察、解釈のいずれかに分類する。
- 諸版の関係についての仮説を、具体的な手がかりと別の説明の可能性に照らして評価する。
- 重要な不確実性を残しつつ、それを調査の断念につなげない結論を書く。

このレッスンの進め方

学習を五回に分けて進めましょう。一回目は第1〜4節を読み、途中の問いに取り組みます。二回目は第5〜9節を学びます。三回目は第10〜15節で書物の構成と歴史的な内容を学びます。第16節は参照用に使ってください。四回目は第17節の資料セットに取り組み、解答例を読む前に自分で解いてみます。五回目は第18節の演習を行い、第19節と照らして解答を確認します。最初の目安として、読解、参照、記述に4〜6時間を確保し、必要に応じて調整してください。

目的は名前の一覧を暗記することではありません。ある主張がなぜ言い過ぎなのか、何がその主張を支えているのか、どのような確認によって改善できるのかを説明することが大切です。

1. 資料としてのグリモワール

研究のための分類

このレッスンでは、ある伝統の中で魔術的とみなされる知識や指示を伝える書物、またはテキストの集合を「グリモワール」と呼びます。これは研究を進めるための定義です。こう分類した書物がすべて均質なジャンルに属するという意味でも、その作り手がこの言葉を使っていたと前提するものでもありません。

この定義は研究対象の範囲を定めるために役立ちます。そのうえで、個々の資料を区別する必要があります。ある一冊には祈り、リスト、図式、処方、注釈が組み合わされ、別の一冊にはその一部だけが選ばれているかもしれません。どちらもソロモンに帰されているからといって、まったく同じ著作を伝えているとは限りません。

魔術についての書物を、実践に使われた書物と自動的に同一視してはいけません。一冊の本は、実用の道具、収集品、珍品、商品、論争の材料として流通した可能性があります。どれに当たるかを判断するには手がかりが必要です。指示が書かれているというだけで分かるのは、その指示が筆記または印刷されたことです。誰かが実行したことまでは分かりません。

分けておくべき三つの問い

第一はテキストについての問いです。資料は何を述べているのでしょうか。第二は歴史についての問いです。誰が作成し、変更し、入手し、読んだのでしょうか。第三は資料の主張についての問いです。資料が約束したり語ったりする出来事が実際に起きたと主張するには、どのような証拠が必要でしょうか。

これらの問いに対する答えは、それぞれ異なることがあります。効果を約束する記述があることは確実でも、読者がそれを確かめようとしたかは分からない場合があります。使用に関する書き込みを記録できても、その後に何が起きたかは特定できない場合もあります。この違いを保つことで、研究の精度が高まります。

学習用の例として、「火曜日に試した」という書き込みを考えてみましょう。その一文だけで意味が確定するわけではありません。実行の証言として扱う前に、誰が書いたのか、どの箇所を指すのか、先行する書き込みを写したものではないかを調べる必要があります。仮に個人的な書き込みであっても、記録されているのは「試した」という申告です。それだけでは、結果の原因は確定しません。

流通も内容を変える

オーウェン・デイヴィスは、学識的な魔術の伝承に写本と印刷本がともに関わるあり方を研究しています。2023年の分析では、想定される起源の系統だけでなく、資料の選択、翻訳、再利用にも目を向けるよう促しています。印刷が写本の書写を一挙に置き換えたわけではありません。[7]

読解における実践的な意味は、資料を媒体だけで並べないということです。写本が印刷本を書き写していることも、刊本が複数の写本に由来する文章を取り込んでいることもあります。媒体は物としての資料を記述する助けになりますが、伝本間の関係は別の方法で論証しなければなりません。

2. 実際に読んでいるものを特定する

著作・伝本・個体としての一冊

「著作」とは、さまざまな形で現れるテキストを通して同定しようとする、テキスト上のまとまりです。「伝本」とは、そのテキストのある形を伝える資料です。「個体としての一冊」とは、所在を特定できる個別の物です。研究では、比較における価値を強調するときには「伝本」、物としての個別性を強調するときには「個体としての一冊」という区別を用います。

同じ刊行版の二冊を考えてみましょう。文章と配置の大部分は共通しています。しかし、一方には他方で欠けている紙葉が残っていたり、一方だけに書き込みがあったりするかもしれません。その書き込みを「その版」の特徴として記述すると、一冊で観察したことをすべての個体に当てはめることになります。

この区別は逆の場合にも有効です。異なる二冊に同じ誤植があるのは、同じ印刷時の刷りに属するからかもしれません。その誤植は、二人目の所有者が一人目を写したことの証明にはなりません。説明は、それぞれの一冊が別々の経歴をたどる前の、刊行版の製作過程にある可能性があります。

閲覧に介在するもの

デジタル化された資料は、物の画像を示します。翻刻は、文字や記号を読み取った結果を示します。翻訳は、テキストを別の言語で解釈します。校訂版は伝本を比較し、どの読みを採るかを判断します。どの形式にも、確認できることと、確認が制限されることがあります。

閲覧した資料	妥当に確認できること	記録すべき限界
デジタル画像	配置、文字、目に見える特徴を確認する	解像度や撮影範囲によって細部が見えないことがある
翻刻	語を検索し、翻刻者の読みに沿って読む	綴りの統一や略記の展開が行われていることがある
翻訳	別の言語による解釈を理解する	スペイン語訳の個々の語を、そのまま原文の語とみなすことはできない
校訂版	異読と編集上の判断を検討する	校訂後のテキストは、どの一冊とも完全には一致しないことがある
目録	資料の所在と記述を確認する	資料そのものの調査に代わるものではない

翻訳は何かを介しているからという理由で退ける必要はありません。それを使ってどの問いに答えられるのかを知る必要があります。ある語がどう訳されるかを調べるなら、翻訳そのものが研究対象になります。写本上の表記を調べるなら、画像か、作成方針が明記された翻刻に戻る必要があります。

役に立つ資料の特定

作業用の記録票は、別の人が同じ資料を見つけられるものでなければなりません。使用している形の題名、所蔵機関、請求記号または識別子、参照箇所、資料の形式、閲覧日を記録します。刊行版や翻訳を使う場合は、誰が作成したのかも記します。

不明な欄を、断りなく推測で埋めてはいけません。「著者未詳」「目録が提示する年代」は有用な情報です。空白を明示すれば、調べるべきことが分かります。情報を作り上げると、その問題が隠れてしまいます。

> **立ち止まって考える。**ある写本のフランス語刊行版をスペイン語に訳したものを読みました。直接参照した資料は何でしょうか。写本を読んだと述べる前に、どの二つの介在する段階に言及する必要があるでしょうか。

3. 扉の記述をそのまま受け入れずに読む

主張	資料が示していること
証拠	確認できること
結論	根拠をもって述べられること

「Memphis, 1517」の事例

ジョセフ・H・ピーターソンによる『Grimorium Verum』のデジタル版には、ヘブライ語からの翻訳に言及し、Plaingièreを「Jésuite Dominicain」と記す扉が再現されています。刊記にはMemphis、Alibeck、1517も示されています。これらは資料自体の記述であり、歴史的な検証の結果ではまだありません。[1]

最初に行うのは、重要な記述を、黙って修正せずに写し取ることです。初めから「1817年刊」と書けば、調べるべき食い違いを消してしまいます。「1517年刊」と書けば、資料の主張を事実に変えてしまいます。最初のメモには、「扉は1517年と記す。年代として妥当かどうかは要検証」と書くことができます。

扉に注目すべきなのは、それが書物の権威を形作っているからです。内容を著名な人物、重んじられる言語、主張される古さと結び付けることがあります。ただし、その見せ方が疑わしく思えるというだけで、印刷者に特定の意図があったと決めつけてはいけません。誰がなぜその要素を選んだのかを説明するには、さらに調査が必要です。

推論を組み立てる

イエズス会の歴史資料によれば、教皇による認可は1540年9月27日です。Boston Collegeは、同年の使徒書簡『Regimini militantis Ecclesiae』に関連する「会の基本綱要」のデジタル版を公開しています。[3]

ここで結び付けるべき情報は二つあります。扉は1517年を掲げていますが、そこにある組織の呼称は、調査している状態の扉を文字どおりその年のものとすることと両立しません。結論の根拠は、書物が古く見えることではなく、具体的な年代上の矛盾です。

結論がどこまで及ぶのかが重要です。この状態の資料について、1517年を無批判に受け入れることは退けられます。しかし、都合のよい数を足したり引いたりして1817年を導くことはできません。また、巻中に伝えられる一つひとつの定型文の年代を特定したことにもなりません。扉、本文、使われた素材には、それぞれ異なる来歴があり得ます。

1540年という年も、印刷物の正確な刊行年に機械的に置き換えてはいけません。これは組織に関する時代錯誤を見つけるための基準です。その語がいつ現れ、どう使われたのかを詳しく調べ、当該個体の物質的な構成も検討すれば、論証をさらに精密にできます。このレッスンでは、その作業を自動的な規則で代用しません。

「1517 [1817]」は何を意味するか

ピーターソンの二言語併記のページには、請求記号8632.aa.5の個体について、British Libraryによるものとされる書誌記述が転記されています。そこに「1517 [1817]」という表記があります。ここで参照するのはその転記であり、同図書館の現行の目録を直接確認したと主張しているわけではありません。[2]

二つの年は異なる役割を持ちます。一方は記載された年を再現し、もう一方は補われた書誌的年代を示します。メモを取る際も、この違いを保つ必要があります。角括弧付きの年代があるというだけでは、それを提案するに至った証拠は説明されません。

慎重に書くなら、次のようになります。「扉は1517年と記す。ピーターソンが転記した書誌記述は、角括弧内に1817年を補っている。指摘した時代錯誤のため、記載された年代を無批判に受け入れることはできない。ただし、それだけでは別の年を立証するには足りない」。

不十分な論証を修正する

「1517年にはイエズス会が存在しなかった。だからこの本は1817年のものだ」という論証には飛躍があります。前半は一つの年代を疑問に付し、後半は別途証拠が必要な年代を導入しています。修正するには、この二つの作業を分け、それぞれの情報源を示し、未確認のことを認めなければなりません。

「この本はすべて偽物だ」と結論するのも適切ではありません。扉の一つの情報が虚偽または不正確でも、歴史資料としての価値まで消えるわけではありません。その物は、製作と受容について引き続き情報を与えます。変わるのは、ある特定の主張をどこまで信頼できるかです。

> **読解の指針。**一つの年代を反証することと、別の年代を立証することは、異なる作業です。強い反論が成り立っても、未解決の部分を自動的に埋めてよいことにはなりません。

4. 資料と併せて目録を読む

もう一つの年代の問題

Wellcome Collectionは『L'art Magique』をMS.983という参照番号で記述し、年代をおよそ1709年としています。目録は、扉に「MCCCIX」とあることに注意を促し、1709年の誤記の可能性を示しています。また、全体の題名が、まとめられた内容すべてを正確には表していないことも指摘しています。[4]

この事例が役立つのは、記された文字、問題の指摘、解釈の提案という三つの水準を保つ必要があるからです。「1709」とだけ記せば、推論の過程が失われます。記載された年だけを記せば、目録の注意書きが隠れます。記録票には両方を残し、その関係を説明しなければなりません。

違いは正確に読み取れます。MCCCIXは1309を表し、1709ならMDCCIXとなります。これで目録が述べる食い違いは理解できますが、自動的に修正して解決できるわけではありません。目録は、同じ巻の別の部分の題にもこの年代が繰り返されていると付記しています。誤記という説明が妥当に見えても、あくまで提案であると明示し続ける必要があります。[4]

おおよその年代は、正確な年代を不器用に表したものではありません。得られている精度についての情報です。「頃」を削れば、証拠を何も加えないまま、主張の確実性だけを高めることになります。

題名と内容は同じではない

MS.983の記述は、一冊の中に複数のテキスト上のまとまりを識別しています。したがって、全体の題名と、実際に用いているテキストを分けなければなりません。冒頭の名は、編纂物の各部分をすべて記述するのではなく、全体を紹介する役割を果たしていることがあります。[4]

これは引用にも関わります。ある部分について述べるなら、その箇所を特定してください。最初の会話では「写本はこう述べる」で足りるかもしれませんが、どの部分がどの読みを伝えるのかが重要な比較では不十分です。

現代の刊行版が、複数の部分を合わせた一冊の最初のまとまりだけを採録したとします。その選録に、巻全体についての目録の記述をすべて当てはめるのは誤りです。また、採録されていない部分はもともとなかったと結論するのも誤りです。編集上の選択と物としての内容は、異なる問いに答えるものです。

記述は変わり得る

目録は、機関が維持・管理する調査のための道具です。古い記述を残すことも、訂正を加えることも、別の解釈を区別して示すこともあります。リンクと閲覧日を記録すれば、どの情報を使ったのかを説明できます。

慎重であるとは、目録のあらゆる記述を恣意的な意見として扱うことではありません。出所を確認し、注記を読み、留保を隠さないことです。機関による記述は通常、作成者不明のラベルよりよい出発点になりますが、それも人の作業によって作られた記述です。

この事例の最小限の記録票

項目	作業用の記録
対象	『L’art Magique』、Wellcome Collection、MS.983
目録による年代	1709年頃
記録された問題	目録は扉のMCCCIXという年代に言及している
参照した資料	機関によるオンラインの記述
導ける結論	目録は年代を提案し、その問題点を説明している
未実施の確認	その個体または複製を調べ、記された文字を物質面から検討する

目録を通して知っただけのことを、実際に見たかのようには記録していません。この違いは一見小さくても、情報をたどれるようにするうえで決定的です。

5. 諸版を比較する準備

問いを絞る

「どのグリモワールが本物なのか」という問いは、たいてい広すぎます。古さ、完全性、宗教的権威、テキストへの忠実さが混ざっている場合があります。比較の前に、その関心を調査可能な問いに変えましょう。「この二つの伝本には、特定の同じ脱落があるか」「調べた資料群の中で、この配置が最初に現れるのはどれか」といった問いです。

二つ目の表現には、「調べた資料群の中で」という限界が含まれています。配置の絶対的な起源を特定することと同じではありません。現存しない伝本や、まだ特定されていない伝本が見つかれば、結果が変わる可能性があります。

短いリスト、ページへの参照、始まりと終わりが分かる一節など、扱いやすい単位から始めましょう。具体的な箇所を記録せずに本全体を比較すると、検証しにくい印象にとどまります。一つのまとまりを比較すれば、何を観察し、どのように結論に至ったかを他の人に示せます。

このレッスンの歴史資料セット

ピーターソンは、関連する印刷された伝本として、Alibeck、Blocquel、1868年のBestetti、1880年のMuzziに結び付くものを挙げています。序論では、イタリア語版がフランス語版に依拠していると論じています。これは編集者の結論です。利用する際は誰の結論なのかを明示し、評価する場合にはその論証を確認する必要があります。[1]

ピーターソンがLansdowne 1202に基づいて作成した『Clavicules du Roi Salomon』第三書のデジタル版も、比較の対象になります。この写本を18世紀半ばのフランス語の伝本とし、『Grimorium Verum』との類似点を指摘しています。類似していることは、完全な同一性や直接の書写を意味しません。[5]

これらの情報から資料セットを作ることはできますが、系譜をつなぐすべての矢印を独自に描けるわけではありません。伝本の年代や、関連する資料群に属することは、分析の出発点にすぎません。

比較の前に記録すること

それぞれの伝本について、所在、言語、年代、選んだ箇所を記します。画像、翻刻、翻訳のどれを使っているかも記録します。二つのスペイン語テキストが同じに見えるのは、一つの現代語訳が表現を統一したためかもしれません。その一致だけで、古い原資料が同一だとは立証できません。

観察の欄と解釈の欄を分けましょう。前者には「リストの三つ目の項目がない」と、見えることを書きます。後者には「共通する脱落かもしれない」と、説明の案を書きます。二つを混ぜると、情報の記録を変えずに解釈だけを見直すことが難しくなります。

誤っているように見える形を、黙って修正してはいけません。その異常こそ、必要な手がかりかもしれません。作業用の翻刻を残し、比較しやすくするために表記を統一した読みを加える場合は、そのように明示します。

6. 物としての特徴と欠けているものを見る

一冊の来歴

来歴とは、物の所有の歴史を記録するものです。Folgerpediaは、領収書や売買記録などの外部の証拠と、所有を示す書き込みや蔵書票などの内部の印とを区別しています。どちらも、その歴史の再構成に役立ちます。[6]

物としての来歴とテキストの系譜は同じではありません。ある人物がその本を所有していたことが十分な根拠によって特定されれば、所有関係を示せます。しかし、その人物が書いた、すべて読んだ、指示を実行したことが自動的に証明されるわけではありません。

異なる箇所に三つの名前がある一冊を考えてみましょう。それらを歴代の所有者とする前に、所有を示す名前なのか、献辞なのか、参照なのか、写された書き込みなのかを調べます。署名に見える語が、別の役割を果たしているかもしれません。語りたい筋書きに印を合わせるのではなく、印に仮説を合わせ

なければなりません。

ページがないことには複数の説明があり得る

図が見当たらない場合、まずどこにないのかを問います。現物、参照した複製、翻刻、編集者が選んだ範囲の、どれでしょうか。それぞれ状況が異なります。不完全なデジタル化によって、ないように見えることがあります。画像を含まない翻刻では、その形式ゆえに省かれていることがあります。

本文が図を参照しているのに図がない場合、その参照を記録し、どの箇所と結び付くはずなのかを探します。似た図をすぐ挿入してはいけません。主題が似ているだけでは、想定された図だと判断するには不十分かもしれません。

有用な再構成は、加えた要素をどの伝本から得たのか、なぜ適切だと考えるのかを説明します。この作業を隠すと、読者は現代の編集者が作った組み合わせを、元の資料にあったものと受け取る可能性があります。再構成そのものが問題なのではなく、それを直接観察した事実のように示すことが問題です。

複製で観察すること

番号の連続性、テキストの始まりと終わり、目録の注記、目に見える配置の変化を調べます。不連続な箇所があれば、まずその形を記述しましょう。すぐに物理的な欠損とみなしてはいけません。不規則な番号付けや、画像の選択が原因かもしれません。

複製で答えられる問いもあれば、限界のある問いもあります。支持体の厚さ、折丁の構造、インクの細部などは、専門的な調査を必要とする場合があります。よい記録票は、使った資料によってどこまで分かったのかを説明します。

7. 違いが手がかりになるとき

一致の重みは一様ではない

二つのテキストに同じ頻出の定型句があっても、一方が他方に直接依拠しているとは限りません。多くの伝本に現れる一致は、関係を見分ける力が弱いものです。その価値を判断するには、互いに独立していても同じものが現れる可能性を考える必要があります。

珍しい変更の組み合わせは、より多くを示すことがあります。ただし、「珍しい」を「自分には意外だ」という意味にしてはいけません。他の伝本と比較し、どのような書写の仕組みで起こり得るかを問う必要があります。例えば、繰り返される語の間の脱落は、直接の依存関係がなくても、別々に生じることがあります。

『Parvum lexicon stemmatologicum』は、テキストの伝承関係を研究するための専門用語を集めています。問題を精密に捉えるための道具であり、類似を自動的に系譜へ変える装置ではありません。[8]

解答付きの例：役割を失った参照

以下は学習用の例であり、実在のグリモワールのページ付けを再現したものではありません。A、B、Cの三つの伝本があり、どれにも図式を参照する一文が含まれています。表示されているページ番号が、デジタル閲覧ソフトの番号ではなく、それぞれの一冊の番号であることは確認済みです。

観察項目	A	B	C
本文の参照	「12ページ参照」	「12ページ参照」	「18ページ参照」
図式の位置	12ページ	18ページ	18ページ
参照は機能するか	はい	いいえ	はい

Aでは参照が機能しています。Bには、もはや図式にたどり着かない番号が残っています。Cの番号は、その配置に合っています。Bの異常に注目するのは、本の別の構成に由来する要素を保っているように見えるからです。

第一段階では、まだ矢印を描かずに、この異常を記述します。第二段階では説明を提案します。BはAから、Aに似た写しから、あるいは図式が同じく12ページにあった先行する底本から、文章を受け継いだのかもしれません。第三段階では、これらを区別できる情報を探します。

最初の結論は、BにはAのような配置と整合する参照が残っている、というものにできます。Bの製作に使われた現物を特定したわけではありません。また、CがBから派生したと立証したわけでもありません。Cは修正を加えたのかもしれず、別の資料に依拠したか、もっと複雑な経緯を持つ可能性もあります。

二つ目の手がかりを加える

今度は、AとBに近接する箇所で、通常は予想しにくい同じ脱落があるとします。根拠は強まりますが、二つの観察が互いに独立しているかを調べる必要があります。図式を移動させたのと同じ再編成によって脱落も説明できるなら、別々の二つの証拠ではなく、一つの変更が生んだ二つの結果かもしれません。

調査とは、賛成の印を集めることではなく、説明を改善することです。どの新たな観察が仮説を強め、どの観察が弱めるかを記録します。どのような条件でも見直す余地のない仮説は、評価しにくいものです。

8. テキストの類縁関係から伝承の仮説へ

強さの異なる三つの結論

「これらの伝本は素材を共有している」「関連する系統に属する」「Bは個体Aから直接書写された」は、同じ意味ではありません。後になるほど、主張することが増えます。最後の文は現物どうしの具体的な関係を特定するため、一般的な類似以上の根拠がはるかに多く必要です。

年代によって除外できる仮説もあります。後の時代に作られた現物が、それ以前に完成していた別の物の直接の底本になることはありません。しかし、年を順に並べるだけでは、可能な関係を立証したことにはなりません。現存する二つの伝本の間に、失われた中間の伝本があるかもしれません。

また、後代の刊行版が古い読みを残し、早い時期の写しが新しい変更を含むこともあります。物の年代が、そこに伝えられるすべてのテキスト要素の年代を一律に決めるわけではありません。

複数の底本が混ざる

一つの写しが、複数の底本を用いることもあります。伝本系統論の用語では、単純な枝分かれの樹形図ではうまく示せない関係を「網状化」という概念で説明します。伝本間の混合伝承に関わる関係も、その一つです。[9]

実際の作業では、部分ごとに比較する必要があるということです。ある伝本がリストではAと一致し、図ではBと一致するかもしれません。違いがあるたびに混合を想定する必要はありませんが、情報が合わないのに、資料全体が一つの底本だけから派生したと決めつけるべきでもありません。

現代のノートに、ある刊行版から祈りを写し、別の刊行版から図を写したとします。一つの物の中で、文章と図は異なる由来を持ちます。この例は、歴史的な写本でも実際にそうだったと立証するものではありません。一本の系統だけでは説明が足りない場合がある理由を示しています。

図式にも不確実性を示す

関係を描く場合は、それぞれの線の意味を説明します。線が表すのは、仮説としての依存関係、特徴の一致、単なる年代順のいずれかかもしれません。同じ線で三つとも示すと、混乱を招きます。

仮定した中間の伝本は、仮定であると示して加えます。架空の所蔵図書館や正確な年代を割り当ててはいけません。モデルは、暫定的な説明とその帰結を見えるようにするためのものです。文書館の資料を増やすものではありません。

> **結論を出す前に。**情報と両立する別の説明を一つ示しましょう。自分の案のほうがよい理由を説明できなければ、その関係は未確定とするか、主張の範囲を狭めてください。

9. 検証できる結論を書く

情報から文章へ

有用な結論には、対象、観察、推論、限界が含まれます。四つの文が必要とは限りませんが、四つの役割は必要です。「この伝統は古い」では、ほとんど何も特定されません。「目録はこの写本の年代をおよそ1709年とする」なら、どの資料とどの記述主体が主張を支えているかが分かります。

証拠を特定してから動詞を選びましょう。「述べる」は、ある資料に主張を帰します。「記録する」は、記録票に何が記載されているかを表します。「示唆する」は推論を示します。「立証する」を使うには、関連する別の説明をなぜ排除できるのかを説明しなければなりません。

どんな文も「かもしれない」で守ろうとしてはいけません。提案する理由が何もなければ、その表現を付けても学術的な仮説にはなりません。慎重さは、証拠または明確な問題に伴うべきものです。

報告の例

次の段落は、これまでの作業をまとめ、閲覧に介在したものを示しています。

「ジョセフ・H・ピーターソンのデジタル版にある、『Grimorium Verum』の扉を文字で再現したものを参照した。扉は1517年を掲げ、イエズス会に関わる呼称で記されたPlaingièreに翻訳を帰している。1517年より後の組織への言及があるため、調査対象の状態の扉について、この年を無批判に受け入れることはできない。別のページでピーターソンは、角括弧内に1817年を補う書誌記述を転記している。この情報は、編集者を通して伝えられた書誌的年代として記録する。ここに示した論証だけでは、印刷物の正確な刊行年も、そこに含まれるすべての素材の成立年代も確定しない」。

この報告は、本の歴史を網羅しようとするものではありません。具体的な問いに答え、根拠を示し、限界を残しています。より詳しい報告では、当該個体の調査、正確なページ参照、提案されている年代の検討を加えるべきです。

参照したふりをせずに出典を示す

現代の刊行版を通して知った情報なら、その版を引用します。そこで記述される資料に言及することはできますが、直接調べたように見える書き方は避けましょう。参照の経路が分かるようにする必要があります。

参考文献は、題名を増やせばよくなるわけではありません。それぞれが何を提供するのかを説明します。読んだテキスト、対象の記述、歴史的文脈、方法論的な道具の、どれでしょうか。読んでいない著作を、レッスンで展開した論証を支えたかのように挙げてはいけません。

10. グリモワールの構成を読み取る

グリモワールは、題名と年代を特定するだけでは理解できません。知識がどう組み立てられているかも読み取る必要があります。名前のリスト、祈り、処方は、同じページにあっても異なる読み方を要します。すべてを同じ種類の主張として扱えば、各部分の役割と、それらが作る関係を見失います。

最初の通読では、全体の見取り図を作りましょう。読み進めながら、知らない語をすべて解決しようとする必要はありません。節の始まり、語りの声の変化、見出し、番号付きの系列、図、内部参照を特定します。その見取り図があれば、全体の中での位置を把握したうえで難しい箇所に戻れます。切り離された一文が謎めいて見えるのは、秘密を隠しているからではなく、その役割を見失っているからかもしれません。

区別したい六つの記述形式

序文は書物を紹介し、読者を定め、権威を主張します。説明文は、テキストが言及する世界がどのようなものかを説明します。目録的な一覧は、存在とその属性を整理します。指示文は、誰かが何をすべきかを示します。物語は出来事を語ります。書き込みは、本文とは異なる時点で加えられた可能性のある情報です。

これらの形式は混ざることがあります。一つの処方が、権威ある人物への帰属から始まり、指示が続き、約束で終わる場合があります。記述するときは、同じ箇所の中でも役割を分けます。帰属は誰が知識を保証するか、指示は行為がどう示されるか、約束はどの結果が予告されるかに関わります。

形式を認識すると、分析は変わります。約束に対しては、資料がどの効果をどの条件で認めているかを問います。物語に対しては、誰がどの立場から、出来事をどう知って語っているかを問います。リストに対しては、配列の基準と不連続な箇所の可能性を問います。どれも、「この本はすべて真実か」という問いで置き換えることはできません。

記述形式	整理するもの	最初に問うこと
序文	権威と想定読者	読者が信頼すべき理由をどう説明しているか
説明文	世界についての説明	どの関係が存在すると示しているか
目録的な一覧	名称、位階、役割	何を基準に並べているか
指示文	予定される行為	誰が、明示されたどの目的のために行うべきか
物語	語られる出来事	誰がその出来事を知ったと述べているか
書き込み	個別の加筆	どの文章に対応し、いつ加えられたものか

この分類はTMFの読解のための道具です。あらゆる資料に普遍的なジャンル論を押し付けるものではありません。一つの箇所が複数の役割を持つなら、それぞれ記述します。役に立たない分類があれば、その限界を説明します。見取り図の有用性は、具体的な資料についてどのような問いを立てられるかで

判断します。

予告された構成と、残されている構成

『Grimorium Verum』の冒頭は、符号と霊的存在の配置、自然的・超自然的な秘事、著作の鍵という三部を予告しています。歴史的テキストは、ピーターソンの翻刻の冒頭から「Commence la Clef de l'œuvre」までを参照できます。予告された構成は、参照している版に実際に残るものと比較できる情報です。[1]

目次や最初の計画が、そのとおり実現したと決めつけてはいけません。予告された部分がなかったり、異なる出所の節を合わせていたり、機能しなくなった参照が残っていたりする場合があります。まず構成上の予告を記録し、次にその実現を調べます。違いがあれば、原因を決める前に場所と形を記述します。

この手順は循環した読みも防ぎます。本が三部でなければならないと思えば、話題が変わる箇所を無理に使って三つに分けてしまうかもしれません。実際のしるしを記録し、それに基づいてどの区分を提案するか説明するほうがよいでしょう。現代の編集者が読みやすくするために付けた見出しは、歴史的な見出しと区別する必要があります。

短い練習として、「予告されているもの」と「確認できたもの」の二列を作ります。前者には明示された区分だけを書きます。後者には見つけた各節の始まりと終わりを記します。空欄があっても、すぐに欠損を意味するわけではありません。呼び方が違うか、まだ構成を認識できていない可能性があります。

対照例：箴言による構成

『Arbatel』は別の知識の組み立て方を示します。ピーターソンがまとめたラテン語本文と歴史的な英訳には、番号付きの箴言と七つ単位のまとまりが見られます。番号で一つの単位を特定し、それ以前の部分とのつながりを調べられます。短い形式であることは、現代的な要約であることを意味しません。各箴言は、指示と主張の連続の一部をなしています。[10]

この構成と存在のリストを比較すると、読み方を調整することを学べます。リストでは繰り返される項目と例外が、箴言の系列では概念の展開と内部参照が重要です。どちらが「より真正か」を決めなくても、異なる読書体験を作っていることは認識できます。

構成の見取り図には関係の欄も必要です。ある節がどの節の準備となるか、どの図がどの箇所に添えられるか、どのリストが後で展開されるかを記します。順序だけを記せば一覧になります。つながりを記せば、書物が読者をどう導くかの説明が始まります。短縮版とより長い版を比較するときにも役立つ区別です。

見取り図から研究の問いへ

序文では十の主題を教えると予告し、八章が残り、結びでも十の主題に言及する架空の本を考えてみましょう。欠損、未完の計画、不規則な番号付け、編集上の選択など、複数の可能性があります。見取り図だけでは決まりませんが、食い違いを特定できます。次に物としての完全性と関連する伝本を調べます。

現物に欠損がなく、他の写しにも同じ八章があるなら、その一冊だけに欠損があるという仮説は弱まります。紙葉が欠け、別の写しに残りの章があるなら、別種の手がかりが得られます。こうして構成の見取り図は、飾りの目次にとどまらず、調査の道具になります。

11. 名称・語りの声・権威

テキストがソロモンを名指しし、一人称で語り、「あなた」に呼びかけていても、三つの位置がそれぞれ特定された歴史上の人物に対応するとは限りません。文章を誰かに帰す前に、資料の中で誰が語り、現物を誰が作ったのかを問います。テキストの声、主張される著者、書写する手、翻訳者は、それぞれ異なり得ます。

『Grimorium Verum』の扉には、ソロモンとの結び付き、主張される原語、翻訳者とされる人物など、複数の権威のしるしが集まっています。すでに年代の問題を検討しました。今度は、この提示が本の中で何をしているのかを問います。内容を権威ある名や言語と結び付けることで、読者に受け取り方を提案しています。[1]

この観察に、扉を作った人の内心を知る必要はありません。目に見える手段と関係を記述できます。印刷者が特定の読者層を欺こうとしたと主張するには、製作の状況、想定読者、流通を調べる必要があります。分析できるテキスト上の役割と、直接観察できない心理的動機を区別しましょう。

著者への帰属と偽託

帰属とは、著作をある著者に結び付けることです。偽託とは、歴史的な著者とは異なる著者名のもとで文章を提示することです。後者の用語を使うには、その食い違いについての論証が必要です。根拠を集める間は、「〜に帰される著作」という表現で、調査結果を先取りせずに資料上の位置づけを正確に示せます。

帰属と物としての偽造を混同してはいけません。ある時代に実際に作られた本が、内容を別の時代の人物に帰すことはあります。それでも物としては歴史的な資料です。また、帰属はすべて同じように働くわけではありません。題名、序文、見出し、後代の目録、読者の注釈に現れる場合があります。誰がどこで帰属させているかを記録します。

著者の名は、一つの著作より広いテキストの伝統をまとめることがあります。ソロモンに結び付く二冊が、主張する権威を共有しながら、異なる内容を伝えることもあります。そのため、「ソロモン系である」は、題名、伝本、該当箇所の代わりにはなりません。この分類は比較の問いを立てるためのもの

で、同一性を宣言するためのものではありません。

書物が想定する読者

指示が「あなた」に向けられるとき、テキストは受け手を構成しています。受け手には、前提とされる知識、義務、能力があるかもしれません。その分析から、資料がどのような読者を期待するかを問えます。歴史上の購入者や所有者すべてと自動的に同一視してはいけません。想定される読者と実際の読者は、別々の研究対象です。

架空の例として、序文は複数言語の習熟を要求する一方、ある一冊の書き込みは基礎的な語を翻訳しているとします。これはテキストの要求と読者の必要の隔たりを示すかもしれません。仮説は書き込みの作成者と年代に左右されます。この例では、テキスト上の期待と受容の手がかりを結び付ける方法を学びます。

知識へのアクセスがどう配分されるかも観察できます。明快さを約束する文もあれば、説明を留保したり、後の指示へ回したりする文もあります。その留保を秘密の口伝系譜の証拠とする前に、表現上の手段、内部参照、不完全な伝承の結果として機能していないか確認します。沈黙には複数の説明があります。

位階の中の権威

霊的存在のリストは、称号、従属関係、領域、役割を割り当てることがあります。歴史的な読解では、テキストがその権威をどう組み立てるかを調べます。存在を検証できる者の名簿を作っているわけではありません。「テキストはXをYの上位者として示す」と書けば、この違いを保ち、伝本間の変化を比較できます。

『Grimorium Verum』の冒頭は、Lucifer、Béelzébuth、Astarothを三つの権力として列挙しています。その後、従属関係と異なる属性が示されます。記述できるテキスト上の体系ですが、他の本の情報を加えるなら、その追加を明示しなければなりません。同名の存在が、別の資料では別の位置を占めることもあります。[1]

百科事典的な項目を作るとき、統一したくなる誘惑は強いものです。位階、役割、姿について一つの答えを示したくなります。しかし、厳密な資料集では、異なる答えをそれぞれの出典とともに記録できます。「この伝本では」という限定は記録を貧しくしません。一様な総合が消してしまう差異の歴史を再構成できるようにします。

権威関係を記録する

有用な記録には、名前の表記、伝本、所在を示す情報、記された属性を含めます。異形の欄と解釈上の注記の欄も加えます。翻訳が名前を統一している場合、読んでいる形と、その存在を特定するために使われる形の両方を残します。歴史的な綴りに、別の版から取った位階を混ぜてはいけません。

例えば、架空の記録に「Asteron、論書A、12葉表、使者と呼ばれる」とあり、別の記録に「Asteron、論書B、30ページ、統治者と呼ばれる」とあるとします。比較はこの違いから始まります。位階の上昇を説明する前に、二つの言及が単に同じ名の形を持つだけでなく、歴史的に関係することを確かめる必要があります。

この節の最後の問いは具体的です。誰が、何を、どの読者に対して、どの資料の中で保証しているのでしょうか。答えられれば、「グリモワールは述べる」という一言で混同されがちな複数の声を分けられたことになります。その区別により、翻訳と注釈を同じ語り手に帰すことなく読めるようになります。

12. 安易な同一視をせずにリストと用語を読む

リストは項目が分かれているため、分かりやすく見えます。しかし、名前だけを写すと失われる情報が、その構成に含まれていることがあります。順序、分類、数、例外も資料の一部です。個別の記録を取り出す前に、まずリスト全体を記録しましょう。

各項目に名前、役割、数を割り当てる架空の系列を考えます。一つには役割がなく、別の一つには数が二つあるとします。書写の誤り、意図的な違い、配置の問題のいずれかかもしれません。現代の表に収まるようにすべての行を統一すると、調べるべきことを隠してしまいます。

語を翻訳するとは何か

翻訳とは、ある意味を別の言語で表す方法を選ぶことです。比較的安定した対応もあれば、複数の意味や歴史的用法がある場合もあります。「espíritu（霊）」「carácter（文字・符号など）」「arte（術・技芸など）」「secreto（秘密・秘事など）」に、今日の日常的な意味を自動的に当てはめてはいけません。文脈と、参照に用いた版や翻訳に基づいて意味を定めます。

この資料群では、「carácter」が心理的な性格ではなく、図形的な符号を指すことがあります。ただし、ある文脈でそう読めるからといって、すべて同じに訳してよいわけではありません。どの動詞を伴い、何を指し、関連する図があるかを問いましょう。辞書の対応だけでは残る曖昧さを、近くの文脈が解決することがあります。

メモでは、原語の形、使用した訳、作業上の説明を三つに分けると役立ちます。その言語を知らない場合は、訳を作成者に帰してください。その訳が意味をどう組み立てるかは分析できますが、根拠なく独自の言語的訂正を示してはいけません。翻訳に依存していることを認めると、読解の精度が高まります。

魅力的な語源説の危険

音の類似は、語源的な関係や歴史的な同一性を立証しません。名前を、知っている語に似た断片に分けるだけでも不十分です。語源の提案には、記録された語形、年代、適切な言語学的規則が必要です。導入的な説明では、ある人による解釈として記録し、その名の最終的な説明にはしないことができます。

名前が複数言語を巡る場合は、とくに注意が必要です。誤り、変形、部分的な翻訳、再解釈が生じることがあります。よく似た二つの綴りに関係があるかもしれず、大きく異なる二つの形が記録された連鎖でつながることもあります。見た目だけでは、どちらも決まりません。

参照用の資料集では、出所を消さずに異形を見つけられるようにします。主要な見出しは案内のために用い、その下に実際に確認される形を所在情報とともに残します。主要な見出しは現代の編集上の判断です。すべての資料がその形を使うかのように見せてはいけません。

数と、完全な目録という約束

テキストが存在の数を予告したら、列挙と比較します。重複、脱落、まとめられた項目があるかもしれません。異なる名前、番号付きの位置、記述の単位など、数える基準を明示してください。結果が違っても、一方が必ず誤りとは限りません。数える単位が違うのです。

十二の存在を予告する架空の目録に十二の項目があり、一項目だけ二つの名を「または」で結んでいるとします。位置は十二、名前の形は十三と数えられます。その項目が二つの存在を示すのか、一つの存在の二つの呼び名なのかを決める前に、著者の誤りと結論してはいけません。文法と文脈に沿って数える必要があります。

順序にも注意が必要です。位階、時間、空間、または伝えられた順番に沿う系列かもしれません。資料や研究の裏付けなしに、どんな数にも象徴的な原理を当てはめてはいけません。書写やページの配置に、より適切な説明がある場合もあります。

不確実性を残す表

未確定のままにできる欄を設けましょう。「記載なし」「判読に疑義あり」「参照確認待ち」を異なる状態として扱います。「記載なし」はその箇所の欠如、「判読に疑義あり」は読解の問題、「確認待ち」は自分の作業状況を表します。すべてを横線に置き換えると、読者はこの区別を失います。

項目	記録すること	避けること
名前	表記と所在情報	断りのない表記統一
属性	その箇所が述べること	別の著作から情報を持ち込むこと
順序	残されている位置	並べ替えた結果を原資料のものとすること
疑問	不確実性の種類	異なる問題を「不明」にまとめること
対応関係	誰が同定を提案しているか	類似を同一性として示すこと

練習として、リストから五項目を選び、構造だけを写します。どの欄があり、どれが繰り返され、どれが欠けているでしょうか。実行の指示を写す必要はありません。次に、名前のアルファベット順一覧に変えると何が失われるかを説明します。これで語彙だけでなく、目録の構成も読み始めたことになります。

13. 画像・図式・文字のページ

図は、なくてもよい付属物ではありません。関係を整理し、項目を特定し、指示文の中で役割を果たすことがあります。意味はページと伝本に左右されます。形が保たれているように見えても、取り出し、整え、現代の記録票に置けば、文脈は変わります。

他の人が確認できる記述から始めましょう。位置、相対的な大きさ、文章との関係、見える要素を記します。文字、線、図形、書き込みを分けます。存在を記録するために、すべての線を解釈する必要はありません。後で同定を見直せる余地を記述に残します。

認識する前に記述する

円形の図を前に、「三群の文字と中央の線がある円」は初期の観察になります。「特定の存在の原初の印章」は、同定、役割、歴史的な先行性を加えています。いずれかを主張できるようになるかもしれませんが、それぞれ別の論証が必要です。見覚えがあることは、資料上の所在情報の代わりにはなりません。

読者は現代の版で見たために、画像を知っていると思うことがあります。その版は再構成、回転、別の図との組み合わせを行ったかもしれません。そのため、探す方向を逆にするとよいでしょう。参照した物から始め、特徴を記録してから比較します。覚えている版に伝本を無理に合わせてはいけません。

図と文章の関係も曖昧な場合があります。配置が変わっていれば、名前の近くの図が必ずその名前に対応するとは限りません。見出し、参照、系列の連続性、他の個体を調べます。空間的な近さは、資料の構成と併せて読むべき手がかりです。

描き直すと何が起きるか

描き直しは、観察した線を新たな図形上の判断へ変えます。線をまっすぐにし、曲線を整え、不明瞭だった接合を確定します。構造の説明には役立ちますが、伝本の複製と黙って置き換えてはいけません。模式図または描き直しと明記し、何を簡略化したかを説明します。

架空の例として、複製では二本の線がかろうじて接しているとします。清書でつなぐと、原資料では明確でない文字や図形を作るかもしれません。離せば、それも一つの判断です。デザインの道具を使うことではなく、得られた読みやすさが解釈に由来することを隠すのが問題です。

色も同様です。単色の資料に、層や関係を区別する現代の色を付けることがあります。凡例で説明すれば学習に役立ちますが、なければ読者は原資料の色だと思うかもしれません。よい視覚化は、観察していないものまで見たと思わせずに、理解を助けます。

別の出典から補われた図

『Grimorium Verum』のデジタル版は、用いた印刷本で図が欠けている箇所を示し、他の伝本の素材を提示しています。その編集作業は注記から調べられます。補われた画像を引用するには、記された出所を保ち、画面に見えるものすべてを同じ印刷本の個体に帰さないようにする必要があります。[1]

この事例は、ウェブページが比較の場である場合を示します。歴史的な文章、訂正、複数の出典の画像、編集者の注釈が含まれています。一画面に表示されるからといって、一つの資料の複製とは限りません。画面上の単位と資料の単位は異なることがあります。

『Lemegeton』の版にも、異なる写本ごとに出所を示した図の付録があります。まさに出所が見えることに価値があります。画像を一つの記録に集める場合も、個別の帰属を保ち、実在しなかった歴史的な一ページとして選集を示さないようにしましょう。[11]

向き・縮尺・切り抜き

二つの画像を比較する前に、向きを確認します。反転は複製、印刷、編集に由来する場合があります。象徴的な変化と決めつけてはいけません。縮尺も誤解を招きます。小さな線を拡大すると、原寸の別の線より強調されて見えます。視覚的な印象だけでなく、特徴と関係を比較します。

切り抜きは文脈の情報を失わせます。孤立した図には、同定のための見出し、読みに疑問を示す注記、位置を示す縁が残っていないかもしれません。ページ全体への参照を保存し、どこを切り抜いたかを説明します。教育用の資料集では、細部と文脈を推測なしで結び付けられるようにすべきです。

解像度は主張できる範囲を制限します。小さな画像で全体の配置は分かっても、ある線がインクか支持体の傷かは判断できないことがあります。ぼやけた拡大を証拠とせず、限界を記録します。画素を増やしても、物についての情報が必ず増えるわけではありません。

参照用の画像記録

記録には、出典、所在情報、記述、文章との関係、編集上の介入を含めます。公開する場合は再利用条件も加えます。オンラインで見られることは、複製のあらゆる権利を持つことを意味しません。画像を入れなくても、安定したリンクと記述によって、架空の複製を作らずに演習を成り立たせられます。

アクセシビリティのための説明は、課題に必要な情報を伝えます。「印章の画像」だけでは不十分なことが多いでしょう。「資料、刊行版、読解を区別する三列の現代の模式図」なら役割を説明できます。代替テキストを、画面上の説明より確実な歴史的解釈にしてはいけません。

学習を確認するため、調べている資料から図を一つ選び、二段落を書きます。第一段落では意味を特定せずに見えるものを記述し、第二段落では解釈を提案して根拠を挙げます。分けられなければ、どの語が記述に結論を持ち込んでいたかを見直しましょう。

14. 歴史的な内容を読む：解説付きの例

以下の解説は、一つのテキスト単位から、範囲を限定した解釈へ進む方法を示します。役割、分類、権威を示す手段に注目し、実践を実行する指示は再掲しません。所在情報から歴史的テキストに戻り、各読解の出発点を確認できます。

第一の読解：構成についての約束

『Grimorium Verum』の冒頭は、内容を部分に分け、読者が後で得られる知識を予告します。書物の紹介とアクセスの約束が組み合わされています。何を提供するかを説明し、全体の有用性への期待を作る「テキスト上の契約」として読めます。ここでの「テキスト上の契約」は分析の道具であり、法律上の文書ではありません。[1]

解説には三つの作業を行います。予告された主題を特定し、読者と主題を結ぶ動詞を観察し、その後の展開箇所を探します。最初の二つは計画を記述し、三つ目はその実現を確認します。主題を繰り返すだけでは、本が参照の体験をどう導くかを説明できません。

約束される知識が、残された内容より広いこともあります。この違いから失われた章を作り上げてはいけません。構成と伝承についての問いを立てることができます。答えるには、計画をその個体の完全性や別の版と関連づけます。序文の解釈は、物としての記述と照らし合わせる必要があります。

短く、根拠を示せる解説なら、「冒頭は本を組織された全体として提示し、各部分の主題を予告する。この予告は読解を方向づけるが、残された構成の確認に代わるものではない」と書けます。誰が約束を信じ、何人が従ったかを述べずに、役割を解釈しています。

第二の読解：秘事の分類

『Arbatel』の箴言22は、知識についての宗教的な説明の中で秘事を定義します。箴言24は秘事を群に分け、異なる範囲を割り当てます。両方とも、ラテン語本文とRobert Turnerの歴史的な翻訳で番号から確認できます。注目するのは知識の分類方法であり、約束を事実として受け入れることではありません。[10]

まず、テキストの中で何を満たすと「秘事」になるかを問います。意図的に隠された情報という日常的な定義を押し付けてはいけません。次に、誰が明かせるのか、どの用途が正当とされるかを問います。前提に同意しなくても、知識へのアクセスについての考え方を読み取れます。

この分類は、現代の読者なら別々の分類に置く事柄をまとめています。現代の図書館に合うよう資料を修正せず、その資料自身の構成を記述します。その後、自分の分類と比較し、二つの分類体系であることを明示できます。現代の体系だけが可能だと考えると、時代錯誤が生じます。

学習に役立つ説明は距離を保ちます。「この箇所は、ある種の知識を啓示に依存するものとして示し、重要性に従って並べている。この分類から、テキストの判断基準が分かる」。その知識が獲得可能だったとも、すべての読者が同じように理解したとも述べていません。

第三の読解：読者と隣人の益

『Arbatel』の紹介部分は、知識を神の栄光、自分自身と隣人の利益に結び付けています。箴言23も、知識の目的をその枠内に位置づけます。これらは歴史的テキストの表現であり、その企てをどう正当化しているかを検討できます。[10]

こうした表現を自動的に飾りとみなしてはいけません。どの限界を設け、どんな読者を想定し、後の内容とどう関わるかを問います。また、すべての読者が善い行動をした証拠だと決めつけてもいけません。規範は資料の提案を表し、歴史上の行動は別途調査が必要です。

別の著作と比較するなら、具体的な点を選びます。それぞれが知識の探究をどう正当化し、他者の利益にどの役割を与えるかを問えます。架空の「善い魔術」「悪い魔術」の大きな区分を対立させる必要はありません。こうした呼称は歴史的な論争に属する場合があり、現れたときは誰の分類かを示します。

資料集で役立つ問いは、「この箇所は、知識の正当な使用をどう定義するか」です。「この本は肯定的か否定的か」では、あまり役立ちません。前者は箇所を特定できる表現と限定した比較に導きます。後者は、尺度の説明がない全体評価で分析を置き換えがちです。

第四の読解：存在の分類

『Grimorium Verum』の権力と従属関係のリストに戻ります。上位関係、依存、役割の配分、空間との結び付きなど、どの関係があるかを記述します。これを観察するために、完全な位階図を描く必要はありません。少数の項目でも、テキスト上の組織の作り方を示せます。[1]

次に名前と位置を分けます。別の伝本が名前を保ちつつ位置を変えているなら、変数は二つです。比較は分類の変化を示せますが、それだけでは説明できません。再編成、誤り、選択、解釈に由来するかもしれません。説明を選ぶには、整った最終的な表以上のものが必要です。

解説では例外にも言及します。他の項目に繰り返される属性が一項目にないなら、脱落か、意味のある違いかもしれません。問題を調べる前に、現代の記録で補ってはいけません。例外も資料の一部であり、規則性より多くを教えることがあります。

自分で一節を解説する方法

四つの段階を使います。著作内にその単位を位置づけ、具体的な特徴を記述し、役割を説明し、結論の範囲を限定します。秘教史全体の要約から始めないようにしましょう。問いと関係のない名前を多く並べるより、一つの箇所がどう働くかを示すほうが、解説は深まります。

300語の解説でも、多くの作業が必要なことがあります。主張の一覧を圧縮するのではなく、証拠を選び、それについて論じなければなりません。文脈が必要なら、解釈を変えるものだけを導入します。年代や異読は、検討する問題を説明する助けになるときに適切です。

「定義する」「提示する」「組み立てる」「約束する」「分類する」などの動詞で、考えを誰に帰しているか確認します。自分の結論へ移るときは、その変化を見えるようにします。内容と解釈を分けるために、重い文章にする必要はありません。誰が何を主張しているかが読者に分かればよいのです。

15. 書物から読者と社会へ

グリモワールは社会的な関係の中にあります。誰かが作り、入手し、保管し、変形し、記述します。その関係を調べることで、内容の読解が広がります。ただし、扉や一つの書き込みから共同体全体を導くことはできません。社会史では、具体的な証拠によって資料を人物や状況に結び付ける必要があります。

まず製作、流通、所有、使用を分けます。印刷者は製作に、販売者は流通の可能性に関わります。書き込みは所有を示すことも、読解についての情報を与えることもあります。一人が複数の役割を持つ場合もありますが、証拠なしにまとめてはいけません。「所有者」は自動的に「著者」や「実践者」を意味しません。

流通の形としての写本と印刷本

写本と印刷の関係は、一直線の置き換えには還元できません。印刷物を書き写したものや、写本の素材を再編成した刊本を調べられます。参考文献に挙げたデイヴィスの研究は、この相互作用の文脈を示します。媒体を、古さ、真正性、実践との近さの自動的な尺度にしてはいけません。[7]

写本は学習用の写し、個人的な選集、注文品かもしれません。印刷本が重要な異読や独自の書き込みを残す場合もあります。有用なのは、その伝本をどの作業が生み、何を根拠に記述できるかという問いです。手作りに見えるからといって、失われた起源への特別な接近が保証されるわけではありません。

資料の入手可能性は写せるものに影響しますが、その具体的な影響は調査が必要です。編纂者が複数の本を持っていれば選べたかもしれず、翻訳一つしか知らなければ素材の範囲は異なったでしょう。これは探索の指針となる可能性であり、不明の書写者に割り当ててよい伝記ではありません。

読解の痕跡とその限界

画像で認識できるなら、語に引かれた下線はページへの介入を示します。読解上の強調と解釈するには、文章との関係を考える必要があります。編集、後の分類、書誌的な点検に由来するかもしれません。その印だけで、付けた人の感情や信念は分かりません。

複数の印が傾向を示す場合があります。日付を体系的に直したり、語を訳したりしていれば、その活動を記述できます。それでも、少数の例から人物全体の像を作らないようにします。読書の歴史は記録された行為に基づき、知り得ない側面を認めます。

架空の例で尺度の違いを考えましょう。余白の翻訳が十個あれば、誰かが言語上の対応を加えたと言えます。筆跡の主が特定されていれば、より正確に帰属できます。しかし、その人が儀礼を行った、結社に属したとは結論できません。能力の記録は、自動的に所属を立証するものではありません。

価格・需要・実際の読解

販売広告は、本がどう売りに出されたかを示せますが、販売部数は立証しません。購入記録は取引を記録しますが、どのように読まれたかを必ずしも示しません。印刷部数は生産についての数であり、読者数の推計には別の前提が必要です。商業的な情報を読むときも、この違いを保ちます。

広告自体も歴史的な内容です。約束を文字どおり受け入れず、提示の戦略として調べられます。「非常に稀少」とする広告は、その形容を記録するのであって、現存部数の測定ではありません。稀少性を評価するには、対象の範囲を定め、適切な書誌情報を調べる必要があります。

高価であることを儀礼使用の自動的な証拠にしてはいけません。収集、古さ、保存状態などが関係するかもしれません。社会的な説明は別の可能性を比較し、情報に基づく必要があります。需要の強さが記録されていても、それだけでは全購入者の動機は分かりません。

非難・禁止・記述

本や実践を断罪する資料があれば、その種類と権威を特定します。断罪は評価と分類行為についての情報です。断罪されたものを再構成するには、情報の入手方法、選択、目的を調べる必要があります。敵意があるから資料が無用になるわけではありませんが、読み方に条件を与えます。

逆の飛躍も避けます。断罪は、対象が帰された力を本当に持っていた証拠にはなりません。恐れ、対立、機関の決定、統制の形を記録しているかもしれません。歴史的な説明では、その資料が答えられる問いを立てます。効力の主張には、引き続きそれに適した証拠が必要です。

架空の記録で、ある権力が書名を列挙せず「秘事の書」の所持を禁じているとします。その地域に残るすべての書名に自動的に禁止を当てはめてはいけません。その分類がどう理解され、どの物が含まれたかを確認する必要があります。行政上の分類と、自分の資料集の分類は一致しないかもしれません。

普遍化せずに比較する

このレッスンの資料群は、特定のヨーロッパのテキストと、それらを参照する際に介在するものに焦点を当てています。結果だけで、すべての魔術や宗教の伝統を説明できるわけではありません。他の文脈との比較には、適切な資料、言語、専門家が必要です。資料集の幅は資料を加えて広げるもので、局所的な説明を全世界に延ばすものではありません。

符号や聖なる名の使用など、形式的な類似は比較の出発点になります。しかし、歴史的接触や共通の普遍的伝統を立証するものではありません。まず何の特徴を比較し、各文脈でどの役割を果たすかを示します。その後、証拠が許す場合に伝承関係を問います。

この姿勢は、現在も続く共同体を、別の資料群から借りた分類に押し込めることからも守ります。当事者自身の呼称と説明も、必要な資料の一部です。導入の段階では、調べている資料群と、比較を広げるのに必要な追加知識を認めることが、責任ある範囲の定め方になります。

16. 参照用ガイド：概念と学習の進め方

初めての通読を終えた後、具体的な疑問に戻るための節です。概念を資料調査での役割から説明し、詳しく扱う節を示します。事例の代わりにはなりません。定義は問題を認識する助けになりますが、論じる力は解くことで身につきます。

物・著作・伝承

著作。さまざまな形を通して認識される、知的またはテキスト上のまとまりです。編纂物や大きく異なる版がある場合、範囲を定めること自体が研究対象になります。似た題名の本がすべて同じ内容を伝えると決めつけず、どの連続性を調べるかを問うために使います。第2節を参照してください。

伝本。テキストのある形を伝え、比較に用いられる資料です。テキストの伝統との関係を強調する用語であり、語られた出来事の目撃者という意味ではありません。後代の伝本にも重要な読みが残り得るため、年代だけで比較上の価値は決まりません。第5・8節を参照してください。

個体としての一冊。特定し、所在を示せる個別の物です。同じ刊行版の二冊でも、完全性、書き込み、所有の歴史が異なる場合があります。特定の印に基づく主張では、その個体を引用しなければなりません。版だけを挙げると、読者はすべての個体に同じ印があると思うかもしれません。第2・6節を参照してください。

編纂物。異なる単位や出所の素材を集めたものです。編纂物と分かっても、出典が分かったことにはなりません。始まり、題名、主題の変化、各部分の関係を調べる必要があります。一つの装丁にまとめられた文章でも、著者や成立時期を共有するとは限りません。第4・10節を参照してください。

異同。比較したテキストや図形要素の形の違いです。語、順序、脱落、配置に関わることがあります。重要性は問いによります。小さな違いがある読解には決定的でも、類縁関係の立証にはあまり役立たない場合があります。原因を割り当てる前に、違いを記述します。第7節を参照してください。

仮定上の中間伝本。現存する資料間の関係を説明するために提案される伝本です。発見された現物と同じではありません。証拠を説明でき、見直し可能であることが有用性の条件です。図式では仮定と明記し、架空の所蔵館や請求記号を付けてはいけません。第8節を参照してください。

製作と参照

来歴。物の所有や保管についての記録された歴史です。内部の印と外部の文書から再構成できます。テキストの起源、著者、成立地の同義語ではありません。図書館が、遠くで作られ、書写から長い年月を経て入手した写本を所蔵する場合もあります。第6・15節を参照してください。

請求記号。機関が所蔵品の中で物の所在を示すために使う識別子です。参照情報の一部なので正確に写します。ページ番号やデジタル画像の識別子と混同してはいけません。機関が請求記号の変更を記録している場合、古い参照と結び付ける際にその情報も残します。第2節を参照してください。

ファクシミリ。資料の見た目を再現することを目指した複製です。切り抜き、縮尺変更、ページの省略など、その範囲を知る必要があります。翻刻とは異なり、デジタルで見たからといって完全な実物調査になるわけでもありません。物の記述に用いる前に、何が再現されているかを確認します。第6・13節を参照してください。

翻刻。資料の文字や記号を読み取って文字にしたものです。方針によって、綴りの保持や統一、略記の展開、疑義の表示が行われます。検索を容易にしますが、判断を含みます。異読を評価する前に方針を確認し、違いが編集から生じた可能性を調べます。第2・12節を参照してください。

所在情報。具体的な箇所や要素を見つけるための情報です。ページ、紙葉、節、箴言番号などがあります。長い著作へのリンクだけでは足りない場合があります。閲覧ソフトの番号と資料自体の番号を区別し、一致しないときは両方を記録して対応を説明します。第6・14節を参照してください。

解釈と記述

帰属。資料が内容を人物、権威、出所に結び付ける関係です。誰がどこで結び付けるかを示します。歴史的なものも現代のものも、確実とされるものも議論中のものもあります。帰属を記録することは、著者が立証されたと認めることではありません。権威ある人物を掲げる本では不可欠な区別です。第11節を参照してください。

指示文。何をすべきかを示す文です。提案された行動の型を記録しますが、自動的に実行を記録するわけではありません。実際の行為を調べるには、別の証拠や文脈づけられた手がかりが必要です。指示に目的があることも、その達成を証明しません。第1・10・15節を参照してください。

パラテクスト。扉、序文、特定の見出しなど、著作を提示し、読み方を導く要素です。分析のための分類であり、重要でない領域という意味ではありません。読解に影響する帰属、予告、編集上の判断を含む場合があります。本文と同時期のものとみなす前に、出所を特定します。第3・10節を参照してください。

受容。著作、存在の像、考えが、後の時代に読まれ、用いられるあり方です。刊行版、書き込み、再解釈がその記録になり得ます。名前が続いていても、すべての役割が続くとは限りません。変化を調べるには、要素ごとに具体的な参照情報を伴ってたどります。第11・15節を参照してください。

再構成。全体を観察できていない状態を、証拠を集めて示す提案です。テキスト、図形、歴史について行うことがあります。何を加え、どこから取り、どの不確実性が残るかを説明しなければなりません。厳密な再構成が有用なのは、その構成要素を直接観察と区別できるからです。第6・13節を参照してください。

問いに合わせた参照順

PDFを見つけたばかりなら、第2・6節から始め、資料を特定して完全性を確認します。その後、第10節の見取り図を使います。この順序なら、現代の選集を歴史的な一冊の完全な複製だと思い込んで、何時間も解釈することを避けられます。

存在の像や名前を調べるなら、第11・12節を組み合わせます。一般的な記録を作る前に、伝本ごとに属性を記録します。画像があれば第13節も加えます。名前の歴史、テキスト上の分類、図像を、年代のない一つの存在像へ融合せず、区別できる記録にします。

年代が問題なら、第3・4節の事例に戻り、第9節を使って結論を見直します。別の年を見つけても作業は終わりません。出所と、物またはテキストのどの部分を年代づけようとするものかを示します。

比較を準備するなら、第5・7・8節を使います。まず問いを絞り、観察と解釈を分けて記録します。図式が単純すぎるようなら、年代順と依存関係を混同していないか、根拠なく中間伝本を排除していないかを確認します。

17. 総合演習：発見から資料集の項目へ

この資料セットは架空のもので、学んだことを組み合わせるために作られています。発見された書物や実在のコレクションには対応しません。複製、目録、編集上の注記を使い、不確実性を作り話に変えずに、教育用の資料集の項目を作成してください。

作業に使う資料

複製には42枚の画像があります。扉には『古の賢者の秘事』とあり、1600年を掲げています。閲覧ソフトは画像を1〜42と数えますが、印刷されたページ番号は1〜36で、そのほかに表紙や番号のない紙葉があります。9ページは「本の末尾」に図があると述べていますが、利用できる画像には見つかりません。

演習用の架空の機関「港の図書館」の目録は、対象をBP 214と特定しています。年代を1820〜1840年と提案し、印刷ページを38ページと記録しています。注記によれば、題名は内容を古の賢者に帰していますが、それ以前の出典を特定していません。この抜粋には、年代判定の根拠の説明はありません。

同じ題名の現代版には、末尾に図があります。編集者は、別の個体BP 319から取ったと述べています。両個体の比較はここでは提供されていません。この版は名前の表記を統一し、複製では番号順のリストをアルファベット順に並べ替えています。

見返しの画像には「Mateoのもの、1891年」というメモが見えます。筆跡の主は未特定です。12ページのそばには、題名も参照情報もない「別の本を見よ」という書き込みがあります。購入記録、書簡、Mateoについての追加情報はありません。

課題と必要な判断

対象と、参照した資料の形式を特定する項目を書いてください。原文の分量の目安は250〜350語です。二つの年代を役割とともに残し、分量の食い違いを説明し、現代版から補われた図を区別します。書き込みにも触れますが、所有者の伝記に変えてはいけません。

次に、優先順に三つの研究の問いを書きます。第一は記述に直接影響する問題を解決する問い、第二はテキスト比較を改善する問い、第三は受容史を広げる問いにできます。不要な仮定に頼らず進めるうえで、なぜその順序がよいかを説明します。

書く前に、「同じ題名」の意味を考えてください。それだけでは、BP 214とBP 319が同じ版の個体だとは言えません。異なる版かもしれません。分かっている関係を記述し、未確認の関係は未確定のままにします。

解説付きの解答例を見る

項目は例えば次のように始められます。「『古の賢者の秘事』、港の図書館、BP 214。42枚の画像からなる複製を参照した。扉は1600年を掲げる一方、目録の抜粋は1820〜1840年の年代を提案する。利用可能な資料に提案の根拠は含まれないため、両方を出所とともに記録する」。

続けます。「複製には印刷された1〜36ページと番号のない部分が見える。目録は38ページとする。この違いについて、完全性と記述の基準を確認する必要がある。画像の枚数と印刷ページ数は同じではない。9ページにある末尾の図への参照は、参照した複製だけでは確実に解決できない」。

最後は次のように書けます。「現代版は、編集者がBP 319に由来するとする図を加えている。BP 214で観察した図ではなく、別の個体からの素材として記録する。同版は名前を統一し、リストを並べ替えているため、照合なしに歴史的な順序の研究に使うべきではない。見返しには『Mateoのもの、1891年』というメモがあり、作成者と役割は調査待ちである。余白の別の本への参照から、その本を特定することはできない。この資料セットは、一つの物と複数の参照段階を記述する情報を与えるが、古代の著者、正確な印刷年、Mateoによる指示の使用を立証しない」。

この解答は、題名、請求記号、複製の構成、記載された年代と帰された年代、編集作業、印という、確認できる情報を保っています。限界は具体的な問題に結び付いています。利用可能な情報まで消してしまう「すべて疑わしい」という一般論に頼る必要はありません。

優先順位と理由

第一の優先事項は、BP 214の完全な記述と機関提供の完全な複製を参照し、分量を明らかにすることです。この確認によって、図がないことの捉え方が変わる可能性があり、閲覧画面だけから物理的欠損と結論するのを防げます。使っている物の基本記述に影響するため、優先します。

第二は、版と配置を特定し、番号順のリストと図をBP 319と比較することです。二つの伝本の関係と、現代の編集者が加えたものを評価できます。照合では、アルファベット順の版を補助道具にする前に、元の順序を保つ必要があります。

第三は、適切な資料がある場合に、来歴の文書と筆跡比較から見返しのメモを調べることです。メモの年は本の製作年とは同じではありません。Mateoを特定できれば所有の歴史は広がりますが、それだけで儀礼の実践は立証できません。

この資料セットが組み合わせるもの

画像、ページ、リストの項目という三つの番号を扱いました。記載された年代、目録による年代、書き込みの年代を分け、観察された図と編集上の追加も区別しました。これらは形式だけの区別ではありません。それぞれが、現代の作業を歴史上の情報と思い込むことを防ぎます。

最初の項目に「Mateoは1600年に残された図を使って実践していた」と書いていたなら、今は三つの独立した飛躍を特定できます。年は扉から、Mateoは後代のメモから、図は別の個体から来ています。一つを直しても他は自動的には直りません。問題を分解する力は、次のレッスンでも中心となります。

18. 調査演習

解答に進む前に課題に取り組みましょう。最初の解答は修正せずに残します。見直した版と比較すれば、推論のどの部分を意識して扱えるようになったかが分かります。

課題1. 断定しすぎた記録を直す

ある受講者の記録には、こうあります。「『Grimorium Verum』。ソロモンが執筆し、Plaingièreがヘブライ語から直接翻訳。1517年にMemphisで刊行。イエズス会は後の時代なので、正確には1817年に印刷されたことが分かる」。

第2・3節の情報を使います。記録を個々の主張に分け、それぞれ考えられる出所を特定し、記録に裏付けられるもの、帰属にとどまるもの、根拠が足りないものを判断します。その後、新しい記録を書きます。原文の分量の目安は120〜180語です。

解答では、記載された年を残し、別の年の出所を特定し、著者、翻訳の原語、印刷地を立証済みとして示さないようにします。すべての動詞を「かもしれない」に変えるだけでは不十分です。

課題2. 伝承の連鎖を作り上げずに比較する

以下の架空の資料セットを使います。年代は演習用の情報であり、歴史的な物の年代判定ではありません。「文章の脱落」は、区切られた一節の共通する省略を意味し、珍しい誤りとは前提しません。

伝本	物の年代	図式への参照	図式の位置	文章の脱落
A	1780年	12ページ	12ページ	なし
B	1820年	12ページ	18ページ	あり

伝本	物の年代	図式への参照	図式の位置	文章の脱落
C	1850年	12ページ	18ページ	あり

すべての情報と両立する説明を二つ書きます。一方ではCがBに依拠してよいものとし、もう一方では中間伝本か共通の出典を置きます。両仮説が共通して説明する観察を示し、区別に役立つ確認を二つ提案してください。

次に、「同じなので、Cは現物Bを直接書き写した」という文を評価します。類似、テキスト上の関係、特定の個体の使用を区別してください。魅力的な系統樹を描くことではなく、どの関係がまだ分からないかを根拠とともに示す課題です。

課題3. 複製に見当たらないもの

20枚の画像からなるPDFを受け取りました。画像8の文章は図を参照していますが、見つかりません。印刷されたページ番号は10から13へ飛び、閲覧ソフトでは画像8から9へ途切れず進みます。目録の注記には22ページとあります。

六段階の確認計画を書きます。現物から一葉が失われたと述べる前に、何を比較すべきでしょうか。また、似た題名の別の本から図を挿入しても、なぜ資料上の問題が解決しないかを説明します。

この演習には複数の答えがあります。デジタル画像の順序、本のページ付け、書誌記述を区別できることを評価します。飛びの原因を正確そうに作り上げることは評価しません。

課題4. 新しい資料に応用する

写本または古い書物について、機関が公開する記録を一つ選びます。魔術と関係のない物でも構いません。機関、参照番号、題名、年代、参照した資料の形式、解釈上の問題を一つ記録します。安定したリンクと閲覧日も含めます。

三つの文を書いてください。記録にある観察または情報、範囲を限定した推論、未解決の問いです。答えるために必要な追加資料を示します。異なる物への応用によって、1517年についての答えだけでなく、手順を学んだかを確認できます。

19. 根拠を示した解答

> **第2節の「立ち止まって考える」の解答を見る**
>
> 直接参照したのはスペイン語訳です。その訳と写本の間には、少なくともフランス語の刊行版と翻訳という段階があります。写本の綴りを評価するには、画像か適切な翻刻を確認する必要があります。翻訳を読むことで解釈された内容を調べられますが、原物を調査したことにはなりません。

課題1. 直すべき点を見る

利用できる情報では帰属を記録できるだけなのに、ソロモンの著者性が事実として示されています。照合した原典を特定せず、ヘブライ語からの直接翻訳を受け入れています。Memphisと1517は扉の記述なのに、製作の事実として扱われています。

最後の文には論理的な誤りもあります。一つの年を退けても、別の正確な年は導けません。1817年は、ピーターソンが転記した書誌記述に帰す必要があります。「1540年より後に印刷されたので1817年だ」と直しても、飛躍は修正できていません。

適切な解答は、例えばこう始められます。「資料は自らをソロモンに結び付く著作として提示し、ヘブライ語からの翻訳を主張する。これらは、ヘブライ語の伝本や著者性の調査によって確認されたものではない」。続いて記載された年を示し、確実性を追加せずに年代上の問題を説明します。

報告例をそのまま再現する必要はありません。ただし、参照した資料で何を見て、何を推論したかを読者が区別できる必要があります。修正版が以前ほど断定的でなくても、一つひとつの主張を確認できるなら改善されています。

課題2. 確定ではなく、二つのモデルを見る

第一のモデルは、BがAのような配置を受け継ぎ、CがBから素材を受け取ったとします。更新されない参照と、B・C共通の脱落を説明できます。ただし、Bが使った現物がAであることも、Cが現存する個体Bを直接使ったことも立証しません。

第二のモデルは、12ページへの参照と文章の脱落を持つ、現存しない伝本Xを置きます。BとCはX、またはXに関係する写しから派生した可能性があります。BとCの直接の書写を必要とせずに、同じ一致を説明します。

演習の条件では、年代から、1850年の現物Cが1820年のBの直接の底本であることは除外できます。しかし、残る二つのモデルのどちらが正しいかは決まりません。脱落が最初に現れた時点も、年代だけでは特定できません。

進めるには、より多くの箇所を比べ、Bの新たな変更がCに残るかを調べられます。また、Cの作成者が特定の底本を利用できたことを示す印、編集上の注記、文書も調べられます。類似を集めるだけでなく、証拠の価値を評価しなければなりません。

起こりやすい仕組みなら、脱落が独立に生じた可能性もあります。そのため演習では、自動的に珍しい誤りとはしないと断っています。優れた解答は、最初から最大の証明力を与えず、どう生じたかを問います。

課題3. どの段階で図がないのかを調べる

妥当な計画は、飛びの正確な箇所と、画像と印刷ページの対応を記録することから始まります。次に、PDFに表紙、白紙、見開きが含まれるかを確かめます。20枚の画像が必ず20ページとは限りません。

第三段階は、完全な目録記録と完全性についての注記を確認することです。第四は、同じ個体の機関提供の複製を探します。第五は、あれば同じ版の別の個体と比較します。第六は、どの段階に欠如があるかを特定する暫定的な結論を書きます。

デジタル化の省略、不規則な番号付け、異なる数え方による記述、物理的な欠損が考えられます。最初の情報だけでは確実に選べません。可能な原因を挙げ、具体的な確認を計画する解答は、根拠のない断定より優れています。

別の本の図を挿入することは再構成です。出所と適切性を説明すれば研究上の提案になり得ますが、元の個体に何があったかは解決しません。編集上の解決と、欠如の歴史的説明は、別の作業です。

課題4. 自分の記録で確認すること

対象の所在が分かり、目録記録と複製を区別し、年代判定の細かな留保を保つ解答にします。推論が単なる情報の言い換えになっていないか確認します。限定した帰結を説明し、その理由を示す必要があります。

役立つ未解決の問いには、調査の道筋があります。「全歴史は何か」では広すぎます。「所有を示す書き込みは、このデジタル化で欠けている見返しの画像にあるか」なら、問題と進むための資料を特定できます。

十分な情報がなければ、その限界を記録します。厳密な記録を作るために、すべての欄を埋める必要はありません。必要なのは、読者が不明なことを確実なことと取り違えないようにすることです。

20. 作業を見直し、学びを定着させる

見直しの基準

基準	達成できている状態	見直すべき状態
特定	他の読者が伝本と使用した資料の形式を確認できる	一般的な題名しかない
帰属	資料の主張と研究者の提案が区別されている	帰属が、立証された著者性に変わっている

基準	達成できている状態	見直すべき状態
比較	関係が、箇所を特定できる違いや一致に支えられる	「似ている」だけの論証になっている
別の可能性	情報と両立する対案を説明している	中間伝本を考えずに連鎖を描いている
結論	各主張の範囲が利用できる証拠と合う	根拠なく正確な年や直接の書写を示している

この表を機械的な採点に使わず、次に見直す箇所を見つけるために使います。特定が不十分なら、まず記録を改善しましょう。どれほど洗練された論証でも、出典の所在が分からないことは補えません。

見ずに思い出す

翌日、記憶だけで答えましょう。扉の年だけではなぜ足りないのでしょうか。個体としての一冊と刊行版はどう違いますか。受け継がれたページ参照は何を示すでしょうか。より古い写本が自動的に原本とはならないのはなぜでしょうか。

その後レッスンを開き、解答を直します。忘れていた区別に印を付けます。一週間後、新しい記録を使って繰り返します。対象を変えることで、例の見た目を覚えるのではなく、手順を思い出す必要が生まれます。

持ち帰るべき考え

グリモワールを歴史的に読むには、権威として扱う前に資料を特定する必要があります。年代、名前、画像は、製作、伝承、参照の歴史の中に位置づける情報です。厳密な結論は、観察から解釈へどう進み、どこで止まる必要があるかを示します。

21. 出典と参考文献

角括弧内の番号は、以下の一覧に対応しています。出典の閲覧日は、スペイン語原文では2026年10月5日とされています。請求記号は資料の所在を特定するために必要な識別子であり、制作上の内部コードではありません。

参照した資料と刊行版

[1] Joseph H. Peterson（編）. 『Grimorium Verum』、フランス語デジタル版、1999年。記載された更新日：2025年7月17日。扉を文字で再現した部分と伝本の紹介を用いています。ページでは、テキストの刊行部分と現代の序論が区別されています。このリンクから、デジタル版と現物を混同せずに該当箇所を確認できます。

https://web.archive.org/web/20260401012849/https://esotericarchives.com/solomon/gv.htm

[2] Joseph H. Peterson（編・訳）. 『Grimorium Verum』、二言語併記ページ、1999年。扉と、末尾に転記された8632.aa.5の書誌記述を参照しています。「1517 [1817]」という表記はこの転記を通して引用しており、British Libraryの現行目録を直接調べたものではありません。

https://web.archive.org/web/20261006224629/https://www.esotericarchives.com/solomon/gv_bi.htm

[3] 『Formula of the Institute』（1540年）. Jesuit Sources Digital、Institute for Advanced Jesuit Studies、Boston College。1540年9月27日の『Regimini militantis Ecclesiae』に関連する文書のデジタル版。組織の年代を確認するための参照資料であり、それだけで『Grimorium Verum』を年代判定するためのものではありません。

https://jesuitsourcesdigital.bc.edu/3df7cmk/

[4] Wellcome Collection. 『L'art Magique』、MS.983、目録記録。提案される年代：1709年頃。資料の特定情報、内容の記述、MCCCIXについての注記を用いています。この記録は、記述の出所としてS. A. J. Mooratの目録を挙げています。ここでは写本の画像を再現していません。

https://wellcomecollection.org/works/kc3yhd2a

[5] Joseph H. Peterson（編・翻刻）. 『Clavicules du Roi Salomon, Livre Troisieme』、British Library所蔵Lansdowne 1202に基づく。2003年のデジタル版、2023年11月26日更新。関連する伝本と、編集を介して参照していることを特定するために用いています。

https://web.archive.org/web/20260715032047/https://www.esotericarchives.com/solomon/ksol3.htm

研究と方法論のための資料

[6] Folger Shakespeare Library. 「Provenance」、Folgerpedia。所有の証拠と来歴の記述についての機関提供資料。物の歴史とテキスト間の関係を区別するために用いています。

https://folgerpedia.folger.edu/Provenance

[7] Owen Davies. “Print Grimoires and the Democratization of Learned Magic in the Later Early Modern Period: Bricolage Tradition and the Cross-Cultural Transmission of Knowledge.” 『Entangled Religions』14.3、2023年。DOI: 10.46586/er.14.2023.10440。University of Hertfordshireのリポジトリで利用できる研究論文です。写本、印刷物、新たな文化的利用の間での流通を学ぶための発展的な読み物です。

https://doi.org/10.46586/er.14.2023.10440

[8] 『Parvum lexicon stemmatologicum』. ヘルシンキ大学が公開する学術的なデジタル資料。テキストの伝承研究の用語を学ぶ入口になります。用語を精密にする助けとなりますが、個々の事例の論証に代わるものではありません。

https://wiki.helsinki.fi/xwiki/bin/view/stemmatology/Parvum%20lexicon%20stemmatologicum/

[9] 「Reticulation」、『Parvum lexicon stemmatologicum』、ヘルシンキ大学。単純な樹形図では適切に示せない関係についての項目。複数の底本を用いた書写の可能性を導入するために用いています。

https://wiki.helsinki.fi/xwiki/bin/view/stemmatology/Reticulation/

内容を読むためのその他のテキスト

[10] 『Arbatel de magia veterum』、バーゼル、1575年。Robert Turnerによる歴史的な英訳、ロンドン、1655年。Joseph H. Petersonのデジタル版にはラテン語本文と歴史的な翻訳が含まれています。紹介部分、七を単位とする構成、箴言22〜24を参照しています。このレッスンの解説はパブリックドメインの歴史的テキストを分析するものであり、現代の序論を再掲したり、新たな全訳を提供したりするものではありません。ページには編集上の表記統一について説明があります。

https://web.archive.org/web/20260905061049/https://www.esotericarchives.com/solomon/arbatel.htm

[11] Joseph H. Peterson（編）. 『Lemegeton Clavicula Salomonis』、デジタル版。編集されたページと個々の資料単位を区別するため、図の付録と、それぞれがどの写本に由来するとされるかを参照しています。画像は再掲していません。この出典が裏付けるのは編集上の構成についての記述であり、言及されたすべての写本を直接調査したことではありません。

https://web.archive.org/web/20261005172413/https://www.esotericarchives.com/solomon/lemegeton.htm

このレッスンの範囲

A、B、C、Xの例、歴史的な特定情報のない事例、演習の架空のPDF、「港の図書館」の資料セットは、The Method Filesが作成した学習用の例です。発見された写本の記述や、独自研究の結果を再現したものではありません。視覚的な図式は説明用であり、原資料の複製ではありません。このレッスンは資料の読解と歴史的な読解を学ぶものであり、儀礼の実行方法を教えるものではありません。